
東方探究綴

@れみリア従

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方探究綴

【Nコード】

N2285BA

【作者名】

@れみリア従

【あらすじ】

みよんなことから幻想入りした少年。

霊夢がその少年を元の世界に帰さなかったら？

そんなifから始まる話です。

基本的に原作設定で進めますが時々二次も入ります。

構想はしてありますが、文才がないのでその辺は勘弁してください。

レビュー等くだされば嬉しいかぎりです。

昼か夜の12時丁度に更新。

紅忌

それは本当に普通の、とある1日の終わりに起こった。

部活を終え、帰宅する途中の出来事だった。

もう大分遅い時間なのだが、季節が季節なのでまだ辺りは暗くな
てはいない。

まだまだ暑い。

コンビニに立ち寄り、特に考えもなくアイスを選ぶ。

……溶けきる前に帰らなくちゃ。

いつもは使わない、近道を通ることにした。

近道というのは、学校と家とを挟むようにある山を登る道のことだ。

単純な直線距離は遙かに短い、部活を終え疲れきった身体にはなかなか堪える坂道だった。

特別な理由が無ければ関わることの無い、そんな道だった。

勢いをつけ、登り坂に入り込む。

始めは順調に進むも、登るに連れて脚の動きが鈍くなる。

最終的には自転車を押して進み、なんとか上までたどり着いた。

小さな山の、頂上。

ここは少し拓けた広場のようになっている。

昔ここには何かの建物があったらしいが、既に取り壊され今は閑散としているだけの場所である。

ここにくる人は殆どいないだろう。

何かの気配を感じ目を凝らしてよく見ると、そこには猫が居た。

全身黒い毛に覆われている。

野良猫だろうか？

なるべく警戒させぬよう、ゆっくりと近づいてみる。

自転車の立てる音以外は何も聞こえない。

意外にも、触れる距離まで近付いてもその猫は逃げない。

人に慣れているのだろうか？

確認すると首輪はないので、恐らく野良だと思う。

撫でてやると目を閉じて、とても気持ち良さそうにしている。

とても可愛らしい。

辺りを見回すと随分暗くなっていることに気付く。

猫と遊ぶのに夢中で完全にこの道を選んだ理由を忘れていた。

もうアイスは手遅れかな…。

そんなことを考えながら自転車に跨がる。

最後に猫の頭を撫でて、出発。

下り坂を抜ければ、家まですぐだ。

深呼吸して、坂道を勢いよく下っていく。

暗いせいで、急いでいるせいで、坂道が何かによって塞がれていることに気付かない。

目前に迫るも、既に遅い。

激突し、自転車ごと空中に投げ出される。

出逢い

「いてて……。」

……どうやら気を失っていたらしい。

それもそうだ。

コンクリートに全身を叩きつけられたら……。

……いや、違う。

何度確かめてもこれは土の感触。

さっきまで通っていた筈の舗装された道はどこにもない。

ひんやりとしたコンクリートの感触なんかどこにもない。

とりあえず冷静に、辺りを見回す。

……辺りの景色も随分と変わってしまっている。

いくら山道と言ったって、ここまで草木は多くなかったし、そんなことより。

山の麓にあった民家が無くなっている。

自分の家も含めて。

何となく違和感を感じすぐに携帯電話を確認するが……圏外。

時計を見ると、どうやら一時間以上倒れていたらしい。

しかし不幸中の幸いか、背中痛みを除けば身体に大きな怪我はないようだ。

直ぐに立ち上がれることができた。

自分のすぐ近くに倒れている自転車は、前輪が折れ曲がりどう考え
てももう乗れないだろう。

唯一の食料だったアイスも泥だらけで食べられたものじゃない（勿論溶けきっているのだが）。

しかしここでどうこうしても何も変わらないだろう。

今の状況をなるべく早く把握したい。

ここは一体どこなのだろうか。

……とりあえず山を降りてみよう。

アテがある訳ではないが、とにかく歩いてみる。

誰かに会うことができれば何か変わるかもしれない。

そう信じたい。

……歩きながら色々考えてみようか。

何かの拍子に別の世界に飛ばされたのか。

或いは何かの拍子にタイムスリップしてしまったのか……。

あまり信じたくないが、そう解釈するのが一番近い気がする。

単純に気絶している間に拐われて、似たような別の場所に置き去りにされた……というのも一応考えられるか。

でも誰が何の為に？

そう考えるとその線は薄い気がする。

……俺は集中すると周りが見えなくなるらしい。

考えている内に辺りの雰囲気は少し変わっていることに遅れて気付く。

木々は少なくなり、坂道はもう既に終わっている。

民家などがありそうな気配は全くないが、山の中をさ迷うよりは

分マシだろつ。

そんなことを思いながら歩き続けていると、どうやら早速いい方向に向いてきたらしい。

向こうに誰か居る。

後ろ姿からどうやら女の子らしいことが分かる。

綺麗な金色の髪に大きなリボンをつけている。

背丈的にどう考えても子供……だよな？

なんでこんな時間にこんな所に？

疑問は尽きないが、折角人に会えたんだ。

とりあえず声をかけてみよう。

早足で少女に近付く。

「あの……。」

「ん？なに？」

髪の色から日本人じゃないのかと思ったが、問題なく言葉は通じる。

「村とか民家が近くにあつたら方向を教えて欲しいんだけど……。」

「人間の村はあっちにあるけど……。」

「本当に？ありがとうございます！」

これでなんとかなる……気がする。

女の子はじろじろこつちを見ている。

視線が気になるが、構わず足を進める事にしよう。

どうなるかは分からないが、こんな所で野宿だけはごめんだ。

それにしてもなんであんな小さな子がこんな所に…？

しかも恐らく1人で。

そこはどうしても気になるが、他人に気を使う余裕が無いのも事実だ。

とにかく教えられた方向に向かって歩く。

……が、直ぐに阻まれた。

「ねえ、ちょっと待ってよ。」

さっきの子だ。

他に人が居ないのだ。

どう考えてもそうだろう。

振り向くとまだこっちをじろじろ見ている。

「なに？」

「あなた……食べられる人類？」

「……え？」

突然の意味不明な質問に戸惑う。

「なに？その食べられるなんとかって。」

「やっぱりそつだ。晩ごはんゲットー。」

はあ？

少女の表情は満面の笑みへと変わる。

晩ご飯……？

意味が全く分からない為、どう反応すればいいかもよく分からない。

しかし呆然と立ち尽くす俺に構わず、少女は更に理解し難い行動を続ける。

「えいつ！」

身体を小さくしてからの、肩からぶつかる形の体当たり。

少女は本気だが、なんとも可愛らしい攻撃である。

しかしその直後、見た目からは予想もつかない衝撃が襲い掛かる。

全く構えて無かったため体全体で受けてしまい、バランスが崩れる。

地面に全身から叩きつけられる。

「げほっ！」

急な痛みから喉が詰まる。

なんだこの力は！？

どう考えても子供のそれじゃない。

構えてなかったとはいえ、自分より一回りも大きい人間が倒れ込む程の力が出せるとは考えづらい。

どこからどう見ても普通の女の子なのだから。

体勢を直したいが、腹部と背部の痛みが重なり立ち上がる事が出来ない。

「流石に一撃じゃ死なないわねー。」

そう言うと少女は直ぐ様俺の手を掴み、“空を飛んだ”。

飛行機みたいに、手を大きく真っ直ぐ広げて。

その広げた腕は、男1人を掴んでいても傾く事なく一直線に伸びている。

それ程この子の力は強いのだろう。

そういえば……。

この子の発言には確かに気になる点があった。

この子の言った「人間の村は」あっちにある」という言葉のチヨイス。

普通なら絶対にそんな言い方しない筈だ。

その不自然さに気付いていたら何か変わっただろうか。

……もう既に遅い。

少しずつ地面が遠くなっていく。

このまま何処かに連れていかれるのか。

それともこの高さから突き落とされるのか。

どちらにしてもこの手が離れた時が一貫の終わりだ。

なんとかしないと…。

「俺……食べられるなんとかって奴じゃないと思うよ…。」

考えを巡らせても、焦りと疲れからこんなことしか浮かばない。

自分の無力さが辛い。

「そうなのかー。でももうなんでもいいや。お腹空いちゃったし。」

少女は更に高度を上げる。

どうにかしてこの状況を打破したいが、全く策が浮かばない。

「このくらいまで上がれば大丈夫かな？」

こんな不条理の連続で。

圧倒的な理不尽で人生が終わるなんて。

「それじゃあねー。いただきます。」

恐怖すら感じる笑顔のまま、少女は躊躇いなく手を離した。

この高さじゃどう考えても助からない。

反射的に目を瞑る。

空中で揉まれ、上も下も分からない感覚が続く。

……。

……。

……あれ？

痛くない。

まだ地面まで届いていないからか？

それにしても時間が掛かりすぎじゃないか、と変に冷静になってしまっ。

ゆっくりと瞼を開くと、そこにはまた別の、リアリティの無い光景が広がっていた。

派手な巫女服を着た人間が、金髪の少女に何かを投げつけ攻撃している。

もう片方の手はしっかりと俺と繋がれ、宙をふわふわ漂っている。

「…………ふう。まだ生きてるみたいね。」

助けてくれる……………のか？

巫女さんは高速で、しかし俺を落とさないように丁寧に空中を移動。

少女が追い掛けるが、速さは歴然だ。

「ちょっとごはん盗らないでよー！」

何かが俺の顔のすぐ横を掠める。

目を凝らしてよく見ると、手の平から色鮮やかな塊のようなものを発射している。

見た目は綺麗だが、あれも恐らくあの子の攻撃手段の1つだろう。

この世界では物を飛ばして攻撃するのだろうか。

よく見ると巫女さんが投げているのはお札のようなものだ。

「人間なんか食べるわけじゃないじゃない。妖怪じゃないんだから。」

札で牽制しながら巫女さんが呟く。

どうやらこの巫女さんは妖怪ではないらしい。

……確実に空を飛んでるけど。

少なくとも元居た世界には素で空を飛ぶ人間はいなかったが。

もう何がなんだか分からないが、俺はこの人を信じるしかない。

心の中で祈りながら、目の前の非現実的な戦いを見守るしかない。

本気を出したのか少女は少しずつ間隔を狭めていく。

巫女さんのスピードも相当のものなのだが、男1人の重さが足されているのだ。

……追いつかれる！

「時間の……無駄よ！」

巫女さんはどこから取り出したのか、大量の札を投げつける。

薄い紙のようなものに見えるが、鋭く一直線に少女を襲う。

少女は大きく回避するが、動きを完全に読みきっていたのか避けた先にも札が投げられている。

目前で何とか2段階目の札を避ける。

……が、札が少女の体勢を崩し、速度が落ちる。

元々傷を追わせる為のものではなかったのだろう。

その隙にどんどん差を広げていく。

……巫女さんの方が何枚も上手だ。

置き去りにされ、もうあの子の姿は殆ど見えない。

「……………もう大丈夫かな。」

ゆっくりと降下し……………着地。

僅か数分のことだが土の感触がとても懐かしく感じる。

胸の鼓動は速まったままだ。

状況が全く読めないが、……確かに生き残った。

「あの……。」

「……とりあえず神社に戻りましょ。話はそれからね。」

巫女の思案

巫女の少女に連れられて、着いたのは神社である。

その見た目の古さから歴史の長さを感じさせる。

派手さはないが、その代わりに色褪せない由緒正しさがある。

「えっと……ここは？」

「博麗神社。私の……家？かな。」

なぜ疑問系か分からないが、ここはスルーで。

「さて、中に入りましょ。」

居間に案内される。

中も純和風な雰囲気では包まれている。

辺りを見回すが、テレビや電話などの電化製品は見当たらない。

それでどこるか電灯もないようだ。

部屋はランプのようなもので照らされている。

電気が通ってないのか？

かなり古い建物ではあるが、ここだけ通ってないとは考えづらい。

電線がまだ敷かれていないというなら……。

……まあ先ほどのことで薄々気付いてはいたが、やはりここは元居た世界ではない。

「座って待ってて。話があるから。」

こっちも聞きたいことがたくさんある。

この世界はなんなのか。

さっきのは一体なんだったのか。

「ごめん、お茶しかなかった。」

「あ、全然大丈夫です。なんかすいません。」

よいしょ、と少女は自分の向かい側に座った。

髪を括る大きな赤いリボンが特徴的だ。

派手な紅白の巫女服に透き通るような黒髪が映える。

……かなりの美人だ。

年はあまり俺と変わらないように見える。

「えーっと、まずは自己紹介かな。私は博麗霊夢。まあ見て分かると思うけど、この神社の巫女よ。」

早口で要点だけを述べている。

……博麗霊夢、珍しい名前だなあ。

「霊夢さんは人間？」

「……当たり前よ。」

霊夢さんの顔付きが少し不機嫌なものに変わる。

「ちょっと聞きたいんだけど、この世界の人は普通に空飛べるの？」

「あー、そういう事。飛ぶ人間は何人かいるかもね。」

彼女のその表情から、この世界では割と当然のことだったことが伺える。

「まあ、そんな話はどうでもいいのよ。あんたの名前は？」

せっかちな性格なのだろうか、早く本題に入りたいらしい。

まだ聞きたいことが色々あったのだが……、仕方ない。

「俺は……。」

そこまで言いかけて気付く。

当たり前に出てくる筈の……。

「……？ どうかした？」

名前が……。

「名前が……分からない。」

「……そう。」

霊夢さんは何かを考えているように見える。

「……」。まあ仕方がないことよ。じゃああなたは今から名無しよ。

ナナシ。」

名無しって……。

自分の名前すら思い出せず、得体の知れない土地に放り出されて、
一体俺はどうしたらいいんだよ？

頭の中が整理がつかない。

心臓が高鳴り、呼吸が荒れる。

出されたお茶を一气飲みして、喉を潤す。

そんな俺の焦りを知ってか知らずか、霊夢さんは話を続ける。

「それと、今日からここで生活してもらおうから。」

「……えっ？」

「ここに住むってこと？」

もう何がなんだか……。

「……なんで？」

「住む所がないんでしょう？……ていうか、これで解散じゃ呼び名を付ける意味がないじゃない。」

そう言われれば、確かにそうだが……。

初対面の美少女といきなり生活なんて話が上手すぎじゃないのか？

いやまあそんなことは置いといて。

「てことは……元の世界には……。」

言いたいことが分かったのか、最後まで言い切る前に答えが返ってくる。

「……………。ええ、帰れないわ。それに、自分の名前も分かんないのに帰ってどうするのよ。」

それもそうだ。

それもそうだけど……。

必死にこの現実には抗える道筋を探すが、どうやら残ってはいないらしい。

……この人を頼る以外は。

せめてもと諦めずに思いだそうとしてみるが、やっぱり無理のようだ。

何処に住んでいて、どんな学校に通っていて。

そういうことは思い出せるが、どうしても……。

自分が何者だったのかがどうしても分からない。

……坂で何かにぶつかった時に頭にぶついたりしたのだろうか。

手で触った限りでは傷はないし、出血もしていない。

「……悩んでもしょうがないわ。なんとかなるわよ。気楽に捉えましょうよ、ね？」

悩む俺を見かねてか、霊夢さんが声を掛ける。

他人の事だからと言ったらそれまでだが、今の俺にはこの位の樂觀さがありがたかった。

気楽に……か。

「そう……だよな。」

「そうよ。今日は疲れてるだろうし、もうそろそろ寝た方がいいんじゃない？」

「そうするよ……。」

優しさが身に染みる。

こんな見ず知らずの人間にどうしてこんなに気を使ってくれるの
だろう。

この世界にはこんな人ばかりなのだろうか。

「とりあえず明日から家事全般はあなたに任せるから宜しく。あんなの部屋はテキトーに選んで。あと私のことは霊夢でいいから。それじゃお休みなさい。」

……そういう事か。

お茶を啜りながら、早口で締める霊夢さん。

養う代わりに雑用を任せる、と。

まあお世話になるのだからそのくらいの仕事をするのは当たり前だ。

一方的に決まった感はあるが、他に選択肢はない。

勿論決して悪い条件だとは思わない。

とりあえず明日から頑張ろう。

気楽に……行こう、うん。

「……………お休みなさい。」

期待と焦り、いやほとんど焦りだけを抱えて居間を後にした。

幻想と幻想郷

今日の空は雲一つない、まさに絶好の洗濯日和だ。

あの日、得体の知れない何かに襲われてから、博麗神社の巫女に救われてから数日が経った。

今こうしてられるのも霊夢さんのおかげだ。

そこは本当に感謝してる。

自分が何者かは分からないが、ここで生きていく意味だけはある。

そう信じて、大きく変わってしまったであろう変わらない日常を送っている。

境内の掃除から料理まで家事の殆どを任されたが、その仕事にももう大分慣れた。

結果として“なんとかなっている”訳である、彼女の言ったように。

……少なくとも生活面だけは。

今思えば、俺にはここで生活するには必要であるという情報、つまり常識がないのだ。

ここが何処なのか。

襲いかかってきたあれは何なのか。

良く良く考えれば何一つ分からない。

……やはりはつきりさせた方がいい。

洗濯物を干し終え、霊夢さんを探す。

直ぐに居間でのんびりしているところを見つけた。

「な、え、霊夢さん。」

「霊夢でいって言うてるでしょ。で、何？」

流石に命の恩人を呼び捨てにはできないだろ……。

「色々聞きたいことがあるんだけど。」

「色々とはまた随分ねえ、まあ知ってることなら答えるけど。」

本当に色々なのだから仕方ない。

「例えばさ、この世界って一体何なの？女の子は普通に空飛ぶしや。」

「ああ、そういう話。そういやまだ話してなかったわね。」

足を崩していた霊夢さんが正座に直したので、それに倣い姿勢を整える。

「そうねえ……、じゃあまずは妖怪について。」

妖怪……か。

そういえばあの夜も妖怪がどつとか言ってたっけ。

「ただ妖怪と言っても本当に色んな奴がいるわ。群れを成してる種族、1匹で行動している雑魚、……1匹でも力を持つてる奴。」

最後の部分だけ霊夢さんの目付きが変わったのは気のせいだろうか。

「まあ大抵の奴が人間から生気を奪ったり、そのまま食べちゃったりするわけよ。」

「じゃあこの前の子も妖怪……。」

あの恐怖すら覚える屈託の無い笑顔が脳裏に浮かび背筋が冷える。

「そうね。あれはかなりの格下だけど。名前は……忘れたわ。」

あれで格下……。

無知だったのもあるが、本当に何も出来なかった。

そんなのがここにはたくさんいるなんて……。

「まあ考えるものはあると思うけど……、これで大体終わりよ。本当に大体だけだね。」

ふう、と一呼吸置いてから。

「じゃあ次は……といってもこれが最後でいいか。ここ、幻想郷について。こっちの世界のことを私達は幻想郷って呼んでるんだけど……。」

「幻想郷？」

「そう、幻想郷。」

日本みたいなものか？

「この博麗神社で幻想郷の外とこっちの世界の境界を管理してるんだけど、それを任されてるのが博麗の巫女である私なのよ。」

なんだかいきなり難しいな……。

外とこつちの境界……？

あまり理解できていないのが表情から読み取れたのだろうか。

「まあ分からないのが普通よ、普通。そんなに気にしないでいいわ。」

俺に構わず話を進めていく。

「で、ここが特に重要なんだけど、妖怪が襲うのは基本的にあんたみたいな外から来た人間だから。」

外Ⅱ俺が居た世界か？

てことは……。

「……ちょっと待って。あんたみたいになって……。」

他にも居るみたいな言い方……。

「……今までこっちに来た人間はどうなったの？全員食べられたってことはないでしょ？」

すかさず質問する。

現にあの夜も1つの命が助かった訳だ。

俺だけが偶然助かったのか？

そんなに奇跡的なことだったのか？

霊夢さんは黙っている。

「実は何とかすれば外に行ける方法とかがあったりするんじゃないか……。そっぴやさつきも外とこっちの境界がどうとかがって……。」

「だから……無理なんだって……。」

俯いて、そう呟いた。

今までの霊夢さんとは違う、とても悲しそうな、辛そうな声色だ。

……確かに何の根拠もなく喋り過ぎた。

「……そっか。それなら仕方ない。」

……仕方ないよ。

「きつと……、なんかなるわよ……。」

「……そうだよ……ね。」

大丈夫、今はなんとかなってるんだから……。

……話を聞いても、結局何かが変わったの訳じゃない。

勿論俺がどうこうできる事じゃないかもしれない。

……。

……霊夢さんなら。

……霊夢さんなら、なんとかできるだろうか。

やっぱり、何回考え直しても、今の俺には頼れるのは霊夢さんしかない。

勝手に期待するのはどうかと思うけど。

無理だと言ったのは霊夢さん本人だけど。

もし本当に奇跡的に俺だけが助かったのなら、もう一度奇跡を信じても……。

もう一度“なんとかなる”を信じて……。

あまりにも自分勝手だろうか。

……。

……沈黙が流れる。

「……湿っぽい話は止め！ナナシ、お茶持ってきて。あとお煎餅。」

「……お茶しかないよ。」

そうだったかしら、と惚ける霊夢さんの表情は普段の自信满满的なものに戻っていた。

この人といればやっぱりなんとかなるんじゃないかな？

そんな気がした。

訪問者

「……さて。」

徐に霊夢さんが立ち上がる。

「どうしたの？」

「ちょっと約束があるから、友達の家に行ってくるわ。まあ留守番しててよ。」

「うん、分かった。行ってらっしゃい。」

それじゃあね、と一声添えてから。

騒がしい戸を開ける音が去り、急な静けさが訪れる。

霊夢さんの友達かあ。

どんな人なんだろうか。

巫女さんの友達なんて全く見当がつかない。

ましてや幻想郷に住んでる人のことなんかさっぱりだ。

……。

……… 独りだとすることないなあ。

今のうちに仕事を終わらせておこうかな。

まずは洗い物でもするか。

……… 今度お茶に合うお菓子を用意しておこう。

手元の湯飲みからぼんやり思い出す。

よし、もう終わったぞ。

自分で言うのもなんだが、かなり手際良くこなせていると思う。

……外の世界に居た時から上手だったのかなあ。

もう何回試したか分からないが、やっぱり駄目だ。

別に外の事を忘れてる訳ではないのだ。

でも自分の事になると殆ど何も思い出せない。

あの辺に住んでた……誰なのか。

あの学校に通っている……誰なのか。

山道で何故か倒れていた、そこからしか自分が分からない。

……はあ。

……いつか帰れる日は来るのだろうか。

物思いに耽っていたその時。

ドオンと大きな音を立てて神社が揺れる。

「なんだ!？」

咄嗟に身構える。

もしかして……あの時の妖怪が襲ってきたのか!？

霊夢さんが居なくなった隙を狙って……。

十分に考えられる。

あの時の妖怪だったら……。

どう考えても俺独りじゃ戦えない。

くそ、焦るな。

どうすればいい？

聞こえる足音が玄関に近付くのが分かる。

「おーい、いるかー？」

もうすぐ入ってくる。

がらがらと音を立てて戸が開く。

恐る恐る覗いてみると、そこに居たのは金髪で黒っぽい服装の女の子だった。

そっぴやあの妖怪の子もあんな髪色でなんだか不思議な黒い服を着ていたっけ……。

でも目の前にいる少女は確かにあの子ではない。

尖った大きな帽子が印象的だ。

「ん……？誰だお前……？」

目の前の少女が呟く。

初対面の相手に誰だとは随分だな。

少しの沈黙が、少女の突拍子もない言葉で破られる。

「お前まさか泥棒じゃ……………！」

少女は右の手の平をこちらに向けて、まるで“何か”を発射するよ
うな体勢で構える。

その右手には見たことのない丸い物が握られている。

……………そういやこのポーズも見たことがあるな。

なんとなくこの会話の噛み合わなさも……………。

そこで俺も気付く。

「あんだこそ妖怪の仲間じゃあ……！」

「妖怪の仲間だ……？何のことだかさっぱりだが、とにかく中に入
れさせてもらっぜ。」

流石に知らない人間(?)を勝手に入れることはできない。

「ちょっと待ってってば……。」

「霊夢居るだろ？私が来たって伝えてくれよ。」

私じゃ分かんねーよ。

とりあえず冷静になろう。

どうやら知り合いみたいだし、命を狙われることもない……等。

「……霊夢さんは出かけたけど。」

「出かけた……？あいつ、友達との約束すっばかして……！」

「いや、友達に会いに行ったよ。」

再び沈黙が流れる。

これって行き違い……。

どちらかが間違えたのだろうか。

「とりあえず一旦戻るぜ……。お前の正体を暴くのはまた次回だ。」

少女は立て掛けてあったのだろうか、少し大きめなサイズの箒を手
に取った。

なんで箒を……？

少女がその箒に跨がるのとはほぼ同時にやっと理解した。

もしかしてこの格好って魔法使いのつもりか……？

現実でそんなことを思うのもどうかと思うが、ここは幻想郷だ。

幻想郷ならば仕方ない、なんてね。

魔法使いが箒に跨がったらどうなるか、答えは1つしかないだろう。

「じゃあな。多分また来るぜ。」

ふわりと浮くと、その直後もの凄い速さで飛んでいった。

……人が飛ぶのに少し慣れてる自分がいた。

~~~~~

今日の夕食は何にしようか考えていると、どうやら誰か帰ってきたらしい。

誰かと言っても普段は霊夢さんしか居ないのだが、今回は違う。

……霊夢さんは神社に突撃したりしないからだ。

音を立て建物全体が揺れる。

「いって……、またやっちゃった。」

「またってあんた……。」

どうやら昼間の魔法使いも一緒らしい。

ガラガラと音を立てて戸が開く。

「ただいまー。」

「随分遅かったねー。」

「よう、また会ったな。」

「魔理沙が約束間違えるんだもの。おかげで余計な時間食っちゃったわよ。」

……まあなんとなく知ってた。

「人間誰しも失敗はあるぜ。」

「……まあいいわ。とりあえずナナシ、なんか夕食作って。」

「3人分だぜ。」

「はいはい。」

「応お客さんだし、ちゃんと作るけども。」

材料足りるかなあ……。

~~~~~

出来上がったものをテーブルに並べる。

「ほう。なかなか上手そうな料理じゃないか。」

「なかなか使えるでしょ。」

「使えるって……。」

「それにしてもこの男は誰なんだ？」

「まあ簡単に言つとややこしいのよ。」

「成る程ね……。」

何が分かつたんだ。

不思議な会話は続く。

「まあ敵じゃないならいいんじゃないかな。私はよく知らんが。」

夕食に手をつけながら話す。

テキトーな性格だ。

どことなく霊夢さんに似ている。

類は友を呼ぶということなのか。

「どうせまた明日も来るんでしょう？名前くらい言っておいたら？」

「私もそんなに暇じゃないけどな……。まあいいや。霧雨魔理沙だ。宜しくな。えーと……。」

「……ナナシでいいよ。本名じゃないけどね。……名前が思い出せないんだ。」

隠してもしようがないことだ。

「ナナシ……か。ふーん、なかなか苦労してるんだな。」

変に聞かれても何も答えられないので、勝手に解釈してもらえるのは寧ろありがたかった。

「ふう、ご馳走様。なかなか腕を上げたんじゃないの？」

「そうかなあ。そんなことないよ。」

こづは言ってもやっぱり褒められるのは嬉しいことだ。

「なかなか良かったぜ？……私はそろそろお暇させてもらおうかな。」

外はもう大分暗くなっているようだ。

魔法少女を見送るため外へ。

「それじゃあまたな。夕飯御馳走様。」

跨がる筥の穂先からは光の粉のようなものが降り注いでいる。

まさに“幻想”的な光景だ。

魔理沙は筥に乗って浮かび上がり、轟音と共に去っていった。

夜空に架かる一筋の光。

……まるで流れ星みたいだ。

こんな景色が見られるならここで生活も悪くないかな、なんて。

戦う為に、守る為に

魔法少女が襲来（？）した日の翌日。

今日も天気は快晴。

縁側でお茶を楽しみ、ただただ風景を眺める。

……基本的に俺がこっちの世界でやることと言ったら家事くらいしかない。

食事を作り、衣服の洗濯をし、神社を掃除する。

しかしそれも常にやることじゃない訳で、大抵は暇である。

遠くの山を見つめ、頬を撫でる風を感じる。

流石にそんな毎日にも少し飽きが来ていた。

今日の掃除を終わらせ、退屈していた。

夕飯を作り始めるにはまだまだ時間があるのだ。

……ぼんやりと空を眺める。

透き通るような綺麗な青い空。

散りばめられたふわふわ浮かぶ白い雲。

……それと、見覚えのある黒い魔法使い。

凄いスピードで此方に向かってる。

彼女にとってはあの速さが平常運転なのだろうか。

急接近するも、流石に学習したのであろう、激突しないようにゆっくりと降り立つ魔理沙。

「よう、ナナシ。久しぶりだな。」

昨日来たばかりじゃないか、忙しいんじゃないか。

「生憎霊夢さんは居ないけど？」

ついさっき買い物出しに行ったばかりだ。

しばらく帰ってこないだろう。

「いや、今日はお前に話があったな。」

俺に話？

「まあ、とりあえず中入ってよ。」

とりあえずお客にはお茶だ。

お菓子はない。

「お、悪いな。まあ座ってくれ。」

だんだん魔理沙のキャラにも慣れてきた。

「それで、話って？」

「ああ。ナナシ、スペルカードルールって知ってるか？」

何それ。

「いや、初めて聞いた。」

「そうか、やっぱり霊夢は話してなかったか。」

お茶を啜りながら話す魔理沙。

「よし、一から話すぜ。」

要点を纏めると。

正式名称スペルカードルール。

弾幕「っ」「っ」、弾幕遊びなどとも呼ばれるらしい。

根本は決闘である。

ダメージを打撃で与えるのは構わないが、勝負を決めるのは自分の「弾幕」である。

自分の得意技に名前を付け、スペルカードとして使用する。

簡単に言えば相手の弾を避け自分の弾を先に当てればいい。

また、「1人对複数人」「複数人对複数人」もルール上有効である。

なお、この小説では先に3発被弾した側が敗者とする。

とご教授頂いた。

「……………弾幕って？」

「見せた方が早そうだな。例えば……………」

庭に立ち、初めて会った時と全く同じ構えを取る。

やはりあの丸い物が装着されている。

その直後、突き出された右手からキラキラ光る星型の何かが勢いよく飛び出した。

それは近くに生えていた木の腹に当たり、同じくらいの大きさの星型の模様を刻印する。

……… 凄い。

なんだか分からないけど、凄い。

「どうだ？ なかなか綺麗だろ？」

得意気に笑いながら。

「今の………何？」

「だから弾幕だぜ。私のは魔法だな。」

……そういつことが。

点と点が繋がるように、あの夜の光景と魔理沙の説明が重なった。

あの夜霊夢さんは、馬鹿力の妖怪と対等、それ以上の戦いを見せていた。

力と力の勝負では妖怪には到底勝つことの出来ない人間の為のルール、ということだろうか。

霊夢さんの弾幕はお札で、あの妖怪の子の弾幕は……なんだかキラキラした、よく分からないもの。

なんとなく理解したが、その代わりに大きな問題が発生した。

どうしよう……。……。

一般人の俺があんなもの出せる訳ないじゃん。

「まあなんでこんな説明したかと言うとだな……。」

魔理沙の表情が少しだけ暗くなる。

「お前外人だろ？そのお前が身を守る為には……。」

「……分かってる。……このルールで負けた時にどうなるのかも。」

……やはり霊夢さんが言ったように、外から来た人間は全員妖怪に襲われて……。

幻想郷に入ってすぐにはなく、しばらくしてから決闘に負けて……という可能性もある。

美しい自然、不思議な景色に囲まれた幻想郷の裏の顔を垣間見る。

「まあ、そんなに考え込むなって。」

「うん、もうそのことはいいんだ。ただ俺がスペルカードルールで戦う為には弾幕を出せるようになる必要があるからさ。」

「出せないんじゃないや仕方ないな。まあ1発がはつきりしてれば割りと何でもいいらしいしな……。」

地面を指差しながら。

「最悪そこら辺の石を投げつけるしかないぜ。」

今度はにやりと軽く笑みを浮かべる。

「石って……。」

笑い事じゃないぞ。

「まあ怒るなって。いざとなったら私が助けてやるからさ。こっつ見えても結構自信があるんだ。」

奇抜な服装と魔法を使うこと以外はどうみても普通の女の子なのだが、本当に頼ってもいいのだろうか。

軽い沈黙が流れる。

「……よう。」

「何？」

「今日は機嫌がいいからさ、面白い所に連れてってやるよ。」

残ったお茶を一气飲みし、準備し始める魔理沙。

外の香り

箒に跨がり、空を飛ぶ体勢に。

「乗るか？」

「……遠慮しとくよ。」

魔理沙の運転の腕とスピードを考えたら……。

正直に言うと怖い。

「乗らない方がいいぜ。」

乗せようとするなよ。

……留守番を頼まれた訳ではないが、神社を空にするんだ。

念のため書き置きしておこうか。

「魔理沙、ちょっと待ってて。」

「おう。」

急いで部屋に戻る。

いざ書き始めようかというタイミングでまた疑問が1つ。

会話は普通に日本語だが、文字はそのままでもいいのか？

外とか中とか言ってもここは異世界だ。

今までの常識は通用しない。

と言ってもどうしようもないので、まあそのままにしておう。

霊夢さんへ

魔理沙と出掛けてくる。

多分すぐ戻ると思う。

……ナナシでいいか。

最後にナナシと記名。

「魔理沙、準備できたよ。」

「そうか、じゃ早速出発だぜ。」

~~~~~

歩き始めて30分くらい経っただろうか。

魔理沙に案内されて来たのは、あの夜妖怪に襲われた林。

……を更に越えて深い深い森の中へ。

割りと倒れていた地点の近くだろうか。

魔理沙曰くこの森は魔法の森と呼ばれてる

強大な魔力から人間どころか妖怪もあまり近づかないらしい。

まあここら辺はまだ魔力の影響はないらしいが。

こんな危険な場所に魔理沙は研究の為に好き好んで住んでいる。

なんとという変わり者……！

「……見えてきたぜ。」

確かにそこには一件の建物があった。

遠くからでもごちゃごちゃしてるのが分かる。

「あれは？」

「私の知り合いがやってる店だ。掘り出し物が見つかるかもしれないぜ？」

こんな所に客は来るのだろうか……。

更に近付いたが遠くから見たときよりも余計に物が多く感じる。

入り口に大きな看板が1つ。

「……………香霖堂かあ。」

ん？

これは……………。

こっちに入り込んでいた時に乗っていた、俺の自転車だ。

タイヤが折れ曲がって乗り捨てたものなのだが。

なんでこんな所に……………。

「いらっしゃい。」

この店の人だろうか。

眼鏡をかけた男性が1人。

「魔理沙の知り合いかな？」

「あー、一応。」

「一応ってなんだよ。」

魔理沙が横から割り込んでくる。「魔理沙、この方は？」

「おう、そうだった。こいつはナナシ。……斯々然々だ。」

斯々然々で通じるのかよ……。

「……なるほどね。」

似たような会話を以前見たが、ここはスルー。

「僕は森近霖之助。この香霖堂の店主だ。」

「えっと、宜しく。それでちょっと聞きたいことがあるんだけど…。俺の自転車がなんでこんな所に……………」

「なんでって…………、道にお宝が落ちていたらそりゃあ拾うしかないだろう。」

お宝…………？

完全にゴミだと思って棄てたのだが…………。

「まあ、店の中も見ていったらどうかかな？ 外来人の君には懐かしい物も多いだろうし。」

不思議と斯々然々で伝わっているらしい。

それともただ単に見ただけで外来人だと分かるのだろうか。

少し大きめに作られた入り口を通ると、中にも所狭しと物が置かれている。

店主の趣味なのかは分からないが、ここに置かれている物の多くが

恐らく外のものだ。

俺のゴミを「お宝」と表現した意味をなんとなく理解した。

例えばこの目の前の物体。

型は相当古いが、間違いなくコンピュータだ。

これがこの世界にあるのはどう考えても不自然だ。

コンピュータ以外にも、本当に。

本当に色々な物がある。

元の世界に戻ってきたのだと錯覚するくらいに。

正直言って普通ならなんてこと無い物ばかりだ。

……それでもその物たちのお陰で幻想郷と外の世界が繋がっている  
ことが再確認できた。

こんなゴタゴタした店に持つ感情としては可笑しいのだろうが、少し安心した。

辺りを物色して回ると、ある1つの物を見つけ、閃いた。

これなら、もしかして……。

俺は気になったそれを手に取り、2人の所へ持っていく。

「……エアガンだけど、それがどうかした？」

「……やっぱり。」

そう、エアガン。

銃の玩具。

ありがたいことに弾とセットだ。

これなら、あの戦いでも役に立つ。

人間離れした存在の妖怪に当たってもダメージは全く無いだろうが、スペルカードルールならば関係ないのだ。

避けてぶつける。

これなら俺にも扱える。

これなら俺でも戦える。

「なんだそれは？」

魔理沙が口を挟む。

分からないのも無理はないだろう。

「これはね」

説明しながら状態を確認する。

うん、問題なく動きそうだ。

「なんだ。玩具なら私が買ってやるぜ。」

「いや、今回は特別に物々交換でいいよ。」

「えっ？でも俺何も持ってない……。」

「じゃあ……あれとで。」

立て掛けられた自転車が指差されている。

「本当に!？」

「ああ。というか、勝手に持ってきたのは僕だしね。これで正式に僕のものになった訳だ。」

「ナナシ、良かったな!」

本当に良かった。

ここは本当に良い人ばかりだ。

~~~~~

神社への帰り道、俺はエアガンについて魔理沙に詳しく説明した。

魔理沙は箒でふわふわ浮いている。

「この引き金を引くと、こっちから弾が出てさ。」

「成る程なあ。よく分からん。」

……魔法の理屈の方が分からないけどね。

それでも魔理沙は最後まで話に付き合ってくれた。

……楽しい時間はあっという間に過ぎるもので、気付くと神社のすぐ目の前まで来ていた。

「じゃあ私はこの辺で失礼するぜ。」

「え？晩御飯食べてかないの？」

「いや、いい。今日は色々楽しかったしな。」

俺は魔理沙を見送ったあと、神社に戻った。

「お帰り。随分遅かったじゃない。」

ただいま、と返事をしたのと同じくらいに、霊夢さんは俺の新しい武器に気付いたらしい。

「それ、どうしたの？」

「霖之助さんのお店で。」

「ふーん。良かったわね。」

魔理沙にしたような説明をすると、また「良かったわね。」とだけ言った。

紅い霧に包まれて

縁側に1人で座りながら考える。

……坂からこっちの世界に入り込み、もう1週間くらい経っただろうか。

まだまだ暑い日々が続く筈だった。

今日はどうやって涼もうかと、終わりのない問題に挑む筈だった。

しかし突然に、本当に突然に、真夏の太陽は俺たちの前から去ってしまった。

真っ昼間から辺りは冷えきり、夜は寒さを感じる程だ。

それは何故か。

霧である。

昼夜問わず正体不明の霧が発生している。

特に不思議なのは、僅かに赤みを帯びているということだ。

その濃密な霧に隠されて、比喻ではなく本当に太陽は去ってしまったのだ。

昼も夜も大差なく暗い。

日の光は地面まで届かず、植物は冷気でやられてしまった。

遂には夜を本領としている妖怪達が、時間の関係なく蔓延る様になつてしまった。

まあ、そのおかげで弾幕ごっこの練習ができている訳だが。

最近は本当に弱い妖怪相手ならなんとか戦えるになつてきた。

霊夢さん曰く「妖怪ではなく妖精」らしいのだが、正直違いはあんまりよく分からない。

人間と妖怪の違いが分からないのだから、まあ仕方ないということ
で。

魔理沙は魔理沙で何だかんだ暇なのか、殆ど毎日神社に遊びに来る。

霧が出てからもその頻度は変わらない。

時々練習の手伝いをしてくれることもあり、そこはとても助かって
いる。

……外を眺めているとふわふわと妖精が現れる。

普段練習相手にしている、本当に力の弱いものだ。

いつもならそういう類いが神社に近付くこともなかったのだが、そ
れはやはり霧の影響だろうか。

銃を構え、勝負を挑む。

妖精は口や手から弾を出す。

しかし、それはそんなに速くはない。

余裕を持って回避してから銃を構え、撃ち出す。

まずは一発命中。

そうすると、妖怪の弾の性質が変わった。

先ほどの敵を集中して狙う弾とは違い、今度は弾を辺りに一斉に吐き散らす。

無駄撃ちにも程があるが、これはこれで辛い。

ひとつの弾に気を取られていると、別の角度から来るものに反応できな

前方の弾を深く意識し過ぎて、横からの攻撃の確認が遅れる。

……右腕に被弾。

しかし相手の弾の威力はそこまで強くない。

見てみると軽いアザになっているが……まあ、大したことはない。

深呼吸して気持ちを落ち着かせる。

冷静に、冷静に。

感覚的に全ての弾をぼんやり意識し、ぼんやりと位置を把握する。

瞬間的に間隔の広い弾と弾との隙間を潜り抜け、3連射。

敵も動くが、最後の弾が妖精の足を掠める。

よし、あと少しだ。

最後の弾幕は今の2つの複合だった。

じわりと汗が顔を流れるのが分かるが、拭う暇はない。

やたらに撃ちながらも、その中の数発に1発は確実に俺を狙っている。

かなり避けにくいが、もう大分勘を掴めた。

自分を狙っているのはどの弾かを一瞬で判断。

尚且つ他の弾を意識し、間隔を十分に取る。

しっかり狙って……！

最後の1発を命中させると、妖精は爆ぜるように消えてしまった。

「ふう……。」「

身体的にも精神的にも辛すぎる。

大きく動きながらも身体全身に気を回さなければならぬ。

たった3発、それだけで勝敗が決まる。

相手が妖怪なら、たった3発受けただけで……。

……考えるのはよそう。

俺が戦う時なんて俺が唯一1人である時だけだ。

いざという時は2人を頼ればいい。

そこは彼女たちも分かってくれてる。

霊夢さんはかなりの実力者みたいだし、魔理沙も腕には自信があるよつだ。

きつとなんとかかしてくれる。

「なかなか上手くなったわね。外の人間がそこまで出来れば十分よ。」

いつから見ていたのだろうか、縁側にその2人が。

「本当に!？」

「まあね。でも頭が働くような奴になると弾幕も複雑になるから気を付けて。」

魔理沙はいつの間にか俺の腕から奪い取ったエアガンを弄り回している。

それにしても、この霧は一体なんなのだろうか。

日光を通さないだけあって、かなり視界も悪い。

常に出ているのも異常だが、個人的にはこの赤がどうしても気になる。

普通の水じゃないのか？

もしそうだとしたら、いつか人体にも影響が出るかも知れない……。

……2人なら何か知ってるだろうか。

自分の覚えている範囲ではこんなことはなかった為、外の知識は役に立たないだろう。

「この霧のことで何か分かることってある？」

「さっぱりだぜ。」と魔理沙。

……霊夢さんは沈黙している。

「……今までもこういうことってあった？」

そこは2人とも首を横に振る。

葛藤と決意

「…………ふっ。」

慣れた手付きで濡れた衣服を干し終わる。

干したはいいが…………。

どうせこの霧のせいで乾かないのだからする意味は甚だ疑問である。

居間に行くと、いつものように霊夢さんが居る。

しかし居たのはいつものようなのんびりした霊夢さんではなく、何かを深刻に考える彼女だった。

考えるというよりは寧ろ悩んでいるように見える。

「どっかした？」

「……！ ううん。何でもない。」

声を掛けるまで俺の存在に気付かなかったようだ。

それ程集中していたのだろうか。

本当に何でもないのならいいのだが……。

俺が手伝えることならなんでも言っただけ欲しい。

出来ることなんて限られてるだろうけど、それでも。

霊夢さんには本当に感謝してる。

こんな家事なんかじゃお礼しきれない程に。

~~~~~

「……ふっ。」

夕食中、ぼそりと霊夢さんが呟いた。

「どうかしたのか？」

おかずに手を伸ばしながら聞き返す。

まあそれ程興味はなさそうに見える。

「……今から行くわよ。」

「……どこに？」

「犯人の所よ！」

大声に驚いたのか内容に驚いたのか、噎せ出す魔理沙。

背中を擦りつつ、聞き返す。

「犯人って……。居場所知ってるの？」

「そんなのどうにでもなるわ。」

「落ち着けよ霊夢。夕食くらいのんびり食わせてくれ。」

魔理沙には珍しいくらいのもさだ。

「そうだって。いくらなんでもこんな時に……。」

外はとっくに真っ暗になっている。

殆ど変わらないとはいえ、少しでもマシな昼間の方がいいと思うが。

「……そうね。じゃあこれ食べ終わったら出発よ。」

「こんな時」はそういう意味ではなかったのだが……。

どうやら今晚決行するのは変わらないらしい。

変なくらいに意思は堅そうだ。

……ん？

まさかとは思いが、一応聞いておくか……。

「もしかして……俺も？」

「当たり前じゃない。一応戦力になりそうだし。」

えー。

「それじゃ私はこの辺で……。」

「当然魔理沙もよ。」

「……そう来ると思ったぜ。」

魔理沙も大分嫌そうだ。

……つい昼間に出来ることなら何でも手伝いたいと思ったが、これは正直「出来ない」ことに入ると思う。

うん、入る。

そもそも俺は自分の身を守るために特訓しているのだ。

確かに慣れてきたといっても、それは本当に雑魚中の雑魚との戦闘の話。

日光すらも通さない霧を張っちゃうような訳分からん奴にどうこうできる筈がない。

一瞬で御陀仏だ。

しかし一応居候だし命令に逆らうことはできないし……。

結局行くしかないのか……。

「…分かったよ。行くだけ行く……。」

「死にはしないわよ。」

心境を察してくれたのだろうか。

「やっぱり明日にしようぜー」。

「駄目よ。」

そこは速答。

~~~~~

やはり外は少し肌寒いな……。

おそらく7時は回っているのだろう。

辺りは真っ暗だ。

霧の効果もあり本当に視界が悪い。

こんな状態で急に襲われたりでもしたら……。

やっぱり俺には無理だ。

戦闘は頼れるこの2人に任せよう。

「どつちに行くんだ？」

今回は流石に徒歩ではキツイので、仕方なく魔理沙の箒に乗せてもらっている。

もちろん速度は殆ど出さないよう頼んだ。

飛ぶというよりはただ浮かんでいるだけに近い。

乗り心地は悪くないが、やはり少し安定性に欠ける。

超スピードで乗り回せる魔理沙はかなり乗り慣れてるのだろう。

霊夢さんが指差した方向に進む。

「……風が心地良いわね。」

「言うと思ったぜ。」

2人とも余裕だなあ。

求する妖精

激しい戦闘が待ち受けていることは一般人の俺にも分かる。

だが、それにしても2人とも緊張感がない。

下手したら死ぬかもしれない（俺だけ？）のに流石に気を抜きすぎじゃないのか。

魔理沙、俺が乗ってるんだから宙返りとか本当に止めてくれ。

本当に危ない。

恐怖と怒りがごちゃごちゃになった感情を抱え、後ろから魔理沙をひっぱたく。

「痛っ。…何すんだよー！」

いやこっちのセリフだから。

一方霊夢さんはふわふわ漂いながら大あくび。

余裕なのか油断なのか。

余裕ならばまだいいんだけど。

2人の実力は殆ど分からないが、まあ俺よりは確実に強い筈だ。

特に言い出したのは霊夢さんだし。

とりあえず俺は生きて帰ることだけを考えて行動することにしよう。

それにしても、こんなに幻想郷が広がったなんて。

ここまで遠くまで来たのは初めてで、知らなかったことばかりだ。

霧のせいで見晴らしが悪いのが残念だ。

この高さからの景色はきつと素晴らしいものだっただろうに。

どうやら霊夢さんの進んでいる方向から推測すると、すぐ近くに見える湖に向かっていているらしい。

ここからでは湖の向こうまで見通せない。

また、水気が多いせいだろうか、さっきと比べてこの辺だけすごく寒い。

もしかして近くに犯人がいるのだろうか？

「ここに犯人が……？」

それとなく聞いてみる。

「……さあね。まあ行ってみれば分かるわ。」

いや霊夢さんについてきた訳だが……。

「私の勘だとこの湖の上を飛んでる筈だぜ。」

「本当かなあ。」

「さあな。行けば分かるぜ。」

魔理沙のことだしまあ大丈夫だとは思いますが、それでも「湖の上にいる」なんて言われたら意識してしまふ。

何処からか襲ってくるのだろうか。

念のため辺りを見回す。

「そんなに心配しなくても大丈夫だぜ。私の勘は当たらないからな。」

「だったら言うなよ……。」

でもやっぱり怖いものは怖い。

ゆっくり湖の上を進んでいく。

このまま何もなければよかったのだが、やはりそう上手くはいかな

かった。

「あんたたち待ちなさいよっ！」

本当に……敵が来たのか？

湖の真ん中で突然声がする。

しかし2人は反応しない。

聞こえなかったのかな？

俺だけ振り返るとそこには子供がいる。

水晶のような羽根をばたばた動かして、案の定空を飛んでいる。

もう人が空中にいるのは慣れたけどね。

……やはり頭のどこかでトラウマになっているのだろうか。

外の世界にはいないであろう透き通るような水色の髪や、小学生ほどの背丈があの子の妖怪を彷彿とさせる。

勿論あの子程の力はないのかもしれない。

しかしあの子くらいの妖怪なら簡単に蹴散らす程の強者だという可能性も十分にある。

妖怪と妖精の見分けがつかない俺には分からないことだが。

「なんか来たけど?」

霊夢さんは無言。

魔理沙は「ほつとけ。」と一言だけ。

「ちよつとあんたたちっ!」

今度も2人とも完全無視。

何で?

「あたいを無視するなんていい度胸じゃない！」

そう言うと子供は自分の手と手を合わせて花のような形を作り、こちらに向ける。

弾幕か……！？

「あたいを無視する奴らなんか死ねばいいわ！」

少女の指先から何かが飛んでくる。

あれは……氷柱だ。

水が冷やされ凍らされ、数えきれないほどの塊となって襲いかかる。

2人はまだ余所見をしている。

狙われたのは……俺と魔理沙。

あんなのが身体に刺さったら恐らく大怪我だ。

魔理沙頼む……！

魔理沙は箒を少しだけ傾けると、氷柱の弾幕は僅か数センチ横を通過。

また逆に傾け、恐らく当たっていたら弾をギリギリで避ける。

たくさんのかたまりが襲い掛かるが、全てが紙一重で当たらない。

弾と弾との間を縫うように避ける。

凄い……！

「なかなかやるわね……。だったら今度はこれよ！」

氷符 『アイシクルフォール』

「……魔理沙、あれは!？」

「あいつのスペルカードだ！ちゃんと捕まってる！」

先程の直線的な弾幕とは違い、今度は湖から氷が精製され、あらゆる角度から氷柱が発射されている。

2人を包み込むように。

精度はさつき程良くはないようだが、量と範囲がカバーしている。

あの子の前方を気にすればよかったさつきとは違い、今度の危険は“湖全体”から襲い来る。

箒のスピードを上げるが、スペルカードの攻撃範囲が広すぎて逃れられない。

「どつするの！？」

「……大丈夫だ！」

あの子を中心に円を描くように飛んでいた箒の向きを変え、先端を少女に向ける。

左右の氷柱が道を塞ぐように交わるが、魔理沙のスピードが勝り間一髪で潜り抜けることができた。

「……なら……。」

超スピードで急接近。

持ち前の速さを生かし一瞬で間合いを詰める。

「……当たらないだろ？」

魔理沙の突き出した右手は、少女の額に当てられている。

……そういうことか。

遠距離での持久戦なら勝ち目がなかったが、スペルカードの穴を見抜いた魔理沙。

この至近距離はきつとあの大規模な弾幕では狙いをつけられない。

……きつと彼女にも当たる可能性があるに違いない。

それ故の“安全地帯”なのだ。

「いい加減五月蠅くなってきたぜ。その妖精。必死なのは分かるがそろそろ止めとけよ。」

ここまで距離が近ければ少女の細かい表情まで見て取れる。

……瞳に涙が貯まっているのまでも。

「きよ、今日の所は勘弁しといてやるわっ!!」

妖精は悪役的台詞を吐いてどこかに飛んでいってしまった。

「ったく。余計に寒くなったぜ。」

「今のは結局なんだったの?」

「只の一妖精の悪戯だぜ。名前は確か……チロル。」

目を逸らしながら言う魔理沙。

……本当にチロルか？

「妖精なんて本当あんなのばっかよ。一々相手してたらきりないわ。」

「……馬鹿ばっかだしな。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2285ba/>

東方探究綴

2012年1月14日12時49分発行